「杜の都」のご縁

平口　哲夫

杜または森の都として知られる金沢、仙台、熊本の三市のうち、金沢と仙台は私にとって特に縁が深く、楠本牧師とも仙台での出会いが今につながっています。

東北大学基督教青年会会報第十二号に掲載されている同会館（渓水寮）の昭和四六年（一九七一）在寮生一覧には、「平口哲夫　主事文学部（考古学）博士課程一年」、「楠本史郎　経済学部　二年」と記されています。私はこの寮で学部生として四年間過ごしたあと、修士課程二年間は米ヶ袋で間借り生活をし、博士課程に進んでから主事として二年間、また寮生活をいたしました。ですから、楠本牧師とは二年間、「同じ釜の飯を食った仲」ということになります。当時、私も楠本牧師も仙台東六番丁教会の礼拝に出席していましたから、寮生活に戻る一年前、つまり一九七〇年から教会で顔を合わせていたのではないでしょうか。

東北大生時代の楠本牧師は、教会の青年会でも東北地方学生基督者連盟（ＮＳＣＦ）でも、熱心に精力的に活動しておられました。その姿は牧師になってからの活躍ぶりと共通するところがあるように思います。経済学部を卒業してから東京神学大学に進学なさったという話しを間接的に伺ったのは、私が郷里に戻ってからのことですが、さほど意外には感じませんでした。びっくりしたのは、むしろ金沢教会の伝道師として赴任してこられたときです。これはまったく予想しておりませんでした。ましてや私の母教会の牧師になられるとは、当時、思いもしないことでした。ただし、輪島教会の牧師になられたころから、ひょっとすると若草教会に転任ということがあるかも、と密かに予感しておりました。ですから、実際その通りになったとき、神様の摂理というものを大いに感じました。

この原稿を依頼されて執筆にとりかかる前に、小将町の新宅に引越しの際、ダンボールに詰め込んだままとなっていた若草教会週報を取り出し、楠本牧師の着任当初の号を探してみました。一九八八年三月二七日主日礼拝の週報は、表書きはまだ前任者の小出牧師の氏名になっていますが、説教は楠本牧師になっていて、欄外の一番下に「楠本牧師着任＝二九日（火）」と記されています。そして、四月三日の週報からは表書きに楠本牧師の氏名がちゃんと記されています。私は一九七四年四月、つまり金沢に戻ってきた翌月から週報を二年分ないし三年分ごとにファイル保管することにしており、それが現在、十三冊目になっています。楠本牧師着任の号は七冊目の前三分の一のところにありますから、私の保管している週報の半数以上が楠本牧師時代のものということになります。ずしりと重い週報の束を抱えて、改めてスゴイ！と感心したのでした。

私は「ご縁ですね」と言い方が好きです。「縁（えん）」というと、なにか仏教的なイメージがありますが、「縁」は仏縁に限ったことではありません。ちなみに「キリスト教」と「縁」をキーワードにインターネットで検索してみると、カトリック銚子教会のエンリケ・ゴメス神父による「縁とは」というページが見つかりました。「縁」を英語に訳すと relation です。つまり関係という意味です。神との縁、イエス・キリストとの縁として「縁」を受けとめなおすことができます。楠本牧師が若草教会の牧師を退任されて、北陸学院の院長になられたということは、ある時点までは誰しもまったく想定外のことだったでしょうが、私はしみじみ「ご縁ですね」と申し上げ、今後のご活躍を大いに期待するものです。

末尾ながら、いつもにこやかに迎えてくださった弘子夫人に感謝いたします。金沢に来られて間もないころ、つつじが丘の旧宅にお二人で訪ねてこられたときのお姿がいまでもありありと思い出されます。また、近くは、家の「棟上式」のときにご一緒くださいましたが、楠本牧師の説教を言葉通り受けとめた現場監督が「岩のごとく」堅固な基礎にしなければいけないと、普通よりもコンクリート固めを厚くしたものだから、鉄筋コンクリートの高い建物が立つのではないかと、近所の住人が心配したという逸話もついでに紹介しておきます。これからもよろしくお願いいたします。

（すなどり一七二号、二〇〇七）